「予科練」第466号　令和3年9月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

豫科練

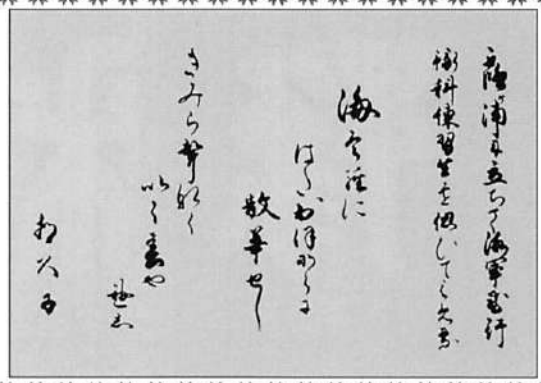
No.466　令和3年

9・10月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.8… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○令和三年度第四十九回評議員会　議事録…… 4
○貸借対照表・正味財産増減計算書・財産目録…… 6
○静岡空襲日米合同慰霊祭開催…… 8
○汝の足下を掘れ、そこに泉湧く…… 9
○天国へのメッセージ…… 10
○三四三空隊史⑧…… 10
○豫科練の戦争　翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑤…… 16
○甲飛九期　明石八朗さん…… 19
○思い出の豫科練…… 20
○大森事務所の移転準備報告…… 21
○雄翔館を見学されて…… 21
○寄付者芳名簿…… 22
○事務局日誌…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　予科練の碑　No.8

岡崎空（第一）が存在された熊野神社前記念碑

このページに掲載した兵器の照会は、第348号平成17年7月号より予科練航空隊の慰霊碑に焦点を充てた記事としたが、今回からは、本人の志とは裏腹に搭乗員への願望は見送られ、当局のご都合で整備・通信等の技術修得を優先する短期六ヶ月間の予科練教育を課せられ、卒業と同時に実施部隊に送り出された予科練の足跡を、正しく語り継ぐ意図で各入隊空の記念碑と、業績を順次ご照会する次第である。

右側の写真は昭和19年4月1日開隊された第一岡崎海軍航空隊の記念碑で、一期生が5月15日入隊した以降、毎月練習生が入隊し八期生までその数は一万八千余名を数えた。

碑の建立は、一期生赤松治夫氏の発案で、「一岡一期若桜会」を結成し、安城市熊野神社前に昭和48年5月20日創建した。揮毫は宮本武司令の筆である。

左側の写真は、名古屋空岡崎分遣隊を改称して、岡崎海軍航空隊と改編し、短期間で優秀なる航空機搭乗員を育成し、その一部は、「沖縄特別攻撃隊」を編成して、桜花の如く潔く散華した隊員、またはその訓練課程で惜しくも殉職された方々百数十名の御霊を追悼すべしとの声が高められ、一期生山崎正雄氏が中心となって、昭和40年「岡空若桜会」を結成し、第八回総会で「慰霊碑」建立を決議し、航空隊跡地に「若桜の碑」と題した碑が、昭和49年11月3日豊田市本町柳川瀬公園内に建立、その維持管理を「岡空若桜会」が担当したが、現在プロペラ会（岡空会）と改称、継承し毎年慰霊祭を行っている。

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

書簡

横浜空所属
海軍上等飛行兵曹
多田健二
二十一歳
宮城県出身

第二期甲種飛行予科練習生

拝啓

ご無沙汰いたしました。その後お変わりございませんか。僕も相変わらず元気です。当地も割合暮し良く、どこも住めば都ですね。仕事に張り合いがあって、面白くやっております。

拓ちゃんは、いよいよ入学試験ですね。頑張って見事パスして下さい。遥かに祈っております。お祖母さんや、赤ちゃんは元気ですか。よろしくお伝え下さい。

ご両親様

昭和十七年八月二十一日ソロモン群島海域の偵察に、九七大艇でソロモン海戦の前哨で出撃し、索敵中に敵機に遭遇交戦中被弾自爆する。

公益財団法人海原会
令和三年度第四十九回評議員会議事録

令和3年度第49回評議員会議事録

（第49回評議員会みなし決議に関する議事録）

令和3年6月3日、理事長菅野寛也が、評議員の全員に対して第49回（令和3年度）評議員会の決議の目的である事項について下記の内容の提案書（海原会第425号）を発したところ、当該提案につき、評議員の全員から書面により同意の意思表示を得たので、海原会定款第19条（決議の省略）に準用される一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第194条の規定に基づき、当該提案を可決する旨の評議員会の決議があったものとみなされた。

記

1 評議員会の決議があったものとみなされた事項の内容

第1号議案

（その1）令和2年度事業報告について（報告事項）

令和2年度に公益財団法人海原会が実施した事業について報告する件

（その2）令和2年度収支決算報告について（審議事項）

令和2年度に公益財団法人海原会が執行した経費について別添資料「令和2年度収支決算報告書」のとおり承認を求める件

別添資料「令和2年度収支決算報告書」

（その3）令和2年度監査報告について（報告事項）

令和2年度に公益財団法人海原会が実施した事業及び執行した経費に関する監査結果について報告する件

第2号議案

（その1）令和3年度事業計画について（報告事項）

令和3年度に公益財団法人海原会が実施する事業について報告する件

（その2）令和3年度収支予算書について（報告事項）

令和3年度に公益財団法人海原会が執行する経費について報告する件

第3号議案

令和3年度人事について

（その1）理事の選任について（審議事項）

本評議員会終了時点で任期が満了する理事9名の後任理事として、令和3年度4月定例理事会で推薦された下記理事候補者9名を、選任することについて承認を求める件

【退任する理事】

（任期満了）

徳永三好氏（茨城県稲敷郡）

【理事会が推薦する理事候補者8名】（重任）

（1）菅野寛也氏

（静岡県静岡市）を理事に選任することに承認を求める件

菅野寛也氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。

（2）平野陽一郎氏

（茨城県稲敷郡）を理事に選任することに承認を求める件

平野陽一郎氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。

（3）保坂俊雄氏

（東京都調布市）を理事に選任することに承認を求める件

保坂俊雄氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。

（4）酒井省三氏

（茨城県稲敷郡）を理事に選任することに承認を求める件

酒井省三氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。

（5）　篠田輝男氏
（茨城県稲敷市）を理事に選任することに承認を求める件
篠田輝男氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。
（6）　安井剛氏
（東京都東村山市）を理事に選任することに承認を求める件　安井剛氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。
（7）　湯原豊一郎氏
（茨城県稲敷郡）を理事に選任することに承認を求める件
湯原豊一郎氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。
（8）　山下桂子氏
（茨城県稲敷郡）を理事に選任することに承認を求める件
山下桂子氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。
【理事会が推薦する理事候補者1名】（新任）
星指隆氏
（東京都練馬区）を理事に選任することに承認を求める件
星指隆氏は、理事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって理事に就任することを承諾した。
（その2）監事の選任について（審議事項）
本評議員会終了時点で任期が満了する監事の後任の監事として、令和3年度4月定例理事会で推薦された下記監事候補者1名を選任することについて承認を求める件
【理事会が推薦する監事候補者1名】（重任）
豊岡昭氏
（東京都葛飾区）を監事に選任することに承認を求める件
豊岡昭氏は、監事就任承諾書を提出して本議事録作成時点をもって監事に就任することを承諾した。
第4号議案
慰霊・顕彰事業基盤整備計画の策定について（審議事項）
「慰霊・顕彰事業基盤整備計画」を以下のとおり策定することの承認を求める件
（1）　計画作成の目的
公益財団法人海原会の公益目的事業である慰霊・顕彰事業の促進を図るために「慰霊・顕彰事業基盤整備計画」を作成してその基盤を整備する。
（2）　計画の内容
ア雄翔園及び雄翔館の整備
（ア）雄翔園及び園内に建立された二人像、記念碑、山本五十六元帥像の整備
（イ）雄翔館内設備の整備
（ウ）所蔵庫及び雄翔館内で保管する、遺影・遺書・遺品等の整備
イ広報活動の強化　慰霊・顕彰事業の財務基盤の健全化を図るために、会勢の維持を目的とした広報活動を行う。
ウ本計画を実行するための経費的裏付けとして「慰霊・顕彰事業基盤整備特定費用準備金」（約400万円）を令和3年度末までに設定する。
第5号議案
顧問の選任について（報告事項）
令和2年2月定例理事会において、以下の会員を、顧問に選任したので報告をする件
【選任された顧問】
六車　昌晃氏（57歳）
（むぐるま　まさてる）
（東京都杉並区）
2評議員会の決議があったものとみなされた事項を提案した者の指名
公益財団法人海原会代表理事
菅野寛也
3評議員会の決議があったものとみなされた時期
令和3年6月17日
なお、提案事項について特別の利害関係を有する評議員はいなかった。
4評議員会議事録の作成に係わる職務を行った者の指名評議員会の決議があったものとみなされた事項を明確にするため、本議事録を作成し、議事録作成者が記名捺印する。
令和3年6月17日
議事録作成者
専務理事　平野揚一郎　印

貸借対照表

公益財団法人　海原会　　令和３年３月31日現在
公益目的事業会計

（単位：円）

科目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　資産の部			
１．流動資産			
現金預金	202,992	205,315	△ 2,323
普通預金	5,129,587	2,094,039	3,035,548
郵便振替	234,669	490,732	△ 256,063
現預金合計	5,567,248	2,790,086	2,777,162
貯蔵品	156,200	306,200	△ 150,000
預け金	0	0	0
仮払金	0	19,439	△ 19,439
流動資産合計	5,723,448	3,115,725	2,607,723
２．固定資産			
(1)基本財産			
有価証券	0	0	0
普通預金	60,000,000	65,000,000	△ 5,000,000
基本財産合計	60,000,000	65,000,000	△ 5,000,000
(2)特定資産			
遺品等補修及び雄翔園整備特定費用準備金	0	0	0
特定資産合計	0	0	0
(3)その他固定資産			
土地	11,894,726	11,894,726	0
建物	3,740,154	3,928,731	△ 188,577
構築物	1,725,858	1,936,989	△ 211,131
その他の固定資産合計	17,360,738	17,760,446	△ 399,708
固定資産合計	77,360,738	82,760,446	△ 5,399,708
資産合計	83,084,186	85,876,171	△ 2,791,985
Ⅱ　負債の部			
１．流動負債			
未払金	0	0	0
預り金	9,189	9,189	0
流動負債合計	9,189	9,189	0
固定負債合計	0	0	
負債合計	9,189	9,189	0
Ⅲ　正味財産の部			
１．指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
２．一般正味財産			
正味財産合計	83,074,997	85,866,982	△ 2,791,985
負債及び正味財産合計	83,084,186	85,876,171	△ 2,791,985
備考	財務諸表に対する注記に記載しているため付属明細書は省略する。		

正味財産増減計算書(税込)

公益財団法人　海原会　　令和２年４月１日から令和３年３月31日まで
公益目的事業会計

（単位：円）

科目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
１．経常増減の部			
(1)経常収益			
基本財産運用益	[9]	[50,000]	△ 49,991
基本財産受取利息	9	50,000	
普通財産運用益	[88]	[418]	△ 330
普通財産受取利息	88	418	
受取会費	[1,862,900]	[2,054,000]	△ 191,100
募金収益	[688,000]	[1,646,000]	△ 958,000
受取慰霊寄付金	[1,047,116]	[19,000]	1,028,116
広告料収益	[255,000]	[260,000]	△ 5,000
雑収益	[51,410]	[118,574]	△ 67,164
経常収益計	3,904,523	4,147,992	△ 243,469
(2)経常費用			
事業費	[6,425,727]	[7,627,429]	△ 1,201,702
慰霊顕彰事業費	(3,506,866)	(4,185,542)	△ 678,676
慰霊祭費	203,993	465,279	△ 261,286
霞ヶ浦支部活動費	132,311	202,164	△ 69,853
遺族支援調査費	36,340	0	36,340
関係団体費	200,060	103,000	97,060
給料手当	655,777	1,291,680	△ 635,903
会議費	29,454	41,927	△ 12,473
旅費交通費	304,125	318,299	△ 14,174
通信運搬費	389,089	351,310	37,779
消耗品費	134,092	142,826	△ 8,734
渉外費	37,895	68,442	△ 30,547
光熱水料	79,784	89,284	△ 9,500
租税公課	74,945	0	74,945
印刷製本	1,452	0	1,452
会費受取手数料	40,674	46,038	△ 5,364
顧問報酬	367,434	337,576	29,858
建物管理費	376,843	364,403	12,440
減価償却費	256,693	363,314	△ 106,621
雑費	185,905	0	185,905

機関誌発行費	(2,875,311)	(3,297,893)	△ 422,582
機関誌発行費	1,512,463	1,532,600	△ 20,137
給料手当	304,606	667,680	△ 363,074
会議費	13,682	21,673	△ 7,991
旅費交通費	141,265	164,531	△ 23,266
通信運搬費	180,731	181,595	△ 864
消耗品費	62,285	73,828	△ 11,543
渉外費	17,602	35,378	△ 17,776
光熱水料	37,059	46,152	△ 9,093
租税公課	34,812	0	34,812
印刷製本	674	0	674
会費受取手数料	18,893	23,797	△ 4,904
顧問報酬	170,672	174,496	
建物管理費	175,042	188,363	△ 13,321
減価償却費	119,233	187,800	△ 68,567
雑費	86,292	0	86,292
支援金	(43,550)	(143,994)	△ 100,444
青少年育成支援金	0	100,000	△ 100,000
給料手当	9,701	16,640	△ 6,939
会議費	436	540	△ 104
旅費交通費	4,499	4,100	399
通信運搬費	5,755	4,526	1,229
消耗品費	1,984	1,840	144
渉外費	560	882	△ 322
光熱水料費	1,180	1,150	30
租税公課	1,108	0	1,108
印刷製本	22	0	22
会費受取手数料	602	593	9
顧問報酬	5,436	4,349	
建物管理費	5,575	4,694	881
減価償却費	3,797	4,680	△ 883
雑費	2,895	0	2,895
管理費	[270,781]	[565,511]	△ 294,730
給料手当	51,057	104,000	△ 52,943
会議費	2,293	3,376	△ 1,083
旅費交通費	23,678	25,628	△ 1,950
通信運搬費	30,293	28,285	2,008
消耗品費	10,440	11,500	△ 1,060
渉外費	2,950	5,510	△ 2,560
光熱水料費	6,212	7,189	△ 977
租税公課	5,835	116,460	△ 110,625
印刷製本費	113	0	113
支払手数料	10,331	21,849	△ 11,518
会費受入手数料	3,167	3,707	△ 540
保険料	32,000	0	32,000
顧問報酬	28,608	27,179	1,429
建物管理費	29,340	29,340	0
減価償却費	19,985	29,253	△ 9,268
雑費	14,479	152,235	△ 137,756
経常費用計	6,696,508	8,192,940	△ 1,496,432
評価損益調整前当期増減額	△ 2,791,985	△ 4,044,948	1,252,963
投資有価証券評価損益等	[ ]		
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 2,791,985	△ 4,044,948	1,252,963
2. 経常外増減の部			
(1)経常外収益			
経常外収益計	0	0	
(2)経常外費用			
経常外費用計	0	0	
当期経常外正味財産増減額	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 2,791,985	△ 4,044,948	1,252,963
一般正味財産期首残高	85,866,982	89,911,930	△ 4,044,948
一般正味財産期末残高	83,074,997	85,866,982	△ 2,791,985
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	
Ⅲ 正味財産期末残高	83,074,997	85,866,982	△ 2,791,985
備考	財務諸表に対する注記に記載しているため付属明細書は省略する。		

財産目録

公益財団法人　海原会
公益目的事業会計

令和３年３月31日現在

(単位：円)

貸借対照表科目	場所・物量等	使用目的等	金額
Ⅰ 資産の部			
1. 流動資産			
現金	手元保管	運転資金	202,992
預金	普通預金		
	三菱ＵＦＪ銀行		5,129,587
仮払金	藤ヶ浦支部		0
郵便振替			234,669
貯蔵品	阿見と予科練	予科練顕彰資料	156,200
流動資産合計			5,723,448

2．固定資産			
（1）基本財産			60,000,000
基本財産	有価証券 野村證券蒲田	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業（公1～公3）に使用している。	0
基本財産	普通預金 三菱 UFJ 銀行	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業（公1～公3）に使用している。	60,000,000 0
（2）特定資産			
遺品等補修及び雄翔園整備特定費用準備金	普通預金　三菱 UFJ 大森駅前支店	特定費用準備資金として公1事業のために使用している。	0
（3）その他固定資産			
土　　地	25.54 平方メートル 東京都品川区南大井 6-16-12 大森コーポベアネーズ建物持分	法人の基礎となる財産であり、公益目的保有財産として、事務所が所在する大森コーポの土地（法人持分）で、95％の割合を公益目的事業で使用している。 また、5％の割合を2号財産として法人管理に使用している。	11,894,726 (11,299,990) (594,736)
建　　物（大森コーポベアネーズ）NO402,403,404	65.55 平方メートル 東京都品川区南大井 6-16-12 大森コーポベアネーズ3室分	事務所 法人の基礎となる財産であり、公益目的保有財産として、95％の割合を公益目的事業で使用している。 また、5％の割合を2号財産として法人管理に使用している。	3,740,154 (3,553,146) (187,008)
構 築 物（山本五十六像）	茨城県稲敷郡阿見町青宿 121-1 陸上自衛隊武器学校構内雄翔館前に設置	公益目的保有財産であり、予科練記念館に設置して公一1事業に使用している不可欠特定財産である。	1,725,858
その他の固定資産計			17,360,738
固定資産合計			77,360,738
資産合計			83,084,186
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未 払 金	京浜印刷（株）		0
預 り 金		源泉所得税	9,189
流動負債合計			9,189
負債合計			9,189
正味財産			83,074,997

静岡空襲 日米合同慰霊祭開催

太平洋戦争末期の昭和二十年六月、静岡空襲で犠牲になった市民二千人と、墜落した米軍B29爆撃機の搭乗員二十三名を追悼する日米合同慰霊祭が六月十九日、静岡市葵区の賤機山山頂で営まれました。

この慰霊祭は、地元の故伊藤福松氏が、たまたまお兄さんの桑畑に米軍機が墜落したことから、僧侶となり私財を投げうって賤機山山頂に世界平和観音像と慰霊碑を建立され日米の犠牲者の供養を行ったことに始まり、最初は静岡市戦災遺族会が主催をしていましたが、ご遺族の高齢化と更に伊藤福松氏がお亡くなりになったことから、現在は海原会理事長の菅野寛也氏が後継者となり主催しております。

昨年はコロナウイルスの影響で中止され、米軍を含めた慰霊祭は二年ぶり。菅野理事長は式典の中で、「慰霊鎮魂の行事を行わずして真の平和はありえない。」とご挨拶をされ、米寿を迎えた今日も意気盛んに慰霊活動に取り組んでおられます。

（事務局）

汝の足下を掘れ、そこに泉湧く

海原会特別会員
多田野　弘

表題の「汝の足下を掘れ、そこに泉湧く」は、物事の本質・真理は外にではなく内に求めよという意味である。それには「気づく」ことが大事で、気づきによって考えが深まり、行動が変わり、その人の生き方が変わる。つまり、人間は気づくことによってのみ、自分を変えることができる。

私たちは誰もが、自分を活かしたいと思う。しかし人は、自分の足下を見ずに、「時間がない」「合理的でない」「周りが悪い」などといった言い訳をして中途半端で投げ出してしまう。責任を転嫁してその場を凌ぎ、自分を合理化してしまいがちである。

先哲は「最も知っていなければならないのに、最も分かっていないのが自分のことである。」と述べている。私たちは、自分という人間がどういうものかが分かっていないのではないか。本当の自分は、「気づく」ことによってしか知ることができない。

人は、心と身体（肉体）と魂で構成されているが、心は生まれてから言葉を覚え、言葉を組み合わせて考えるようになり、自分が作ったものである。心は魂の道具として、また日常生活を営むための、知識、記憶、指向、感覚、感情の機能を備えている。しかし、合理的にしか考えられない欠点があり、コロコロ変わるからあてにはできない。

身体は最初、私達の父母によって準備され、大自然の摂理により生命を与えられて、この世に人間として生まれたのである。身体は、心と魂の容器であって、真の自己ではない。死滅すると元素「土」に戻る。

生命には、宇宙の意志を帯びた魂が含まれている。だから絶大な力が備わっているのだが、色も形もないためその存在を証明できない。

しかし、「魂は肉体に宿り、心と身体を支配し・統御する」といわれ、魂こそが真の自己だといえる。

私にも生涯を変えさせた「気づき」が何度かあった。それは、一途に取り組みどうにもならないと諦めた瞬間、脳が解放され「無心」になっていた時に多かった。脳が解放された状態とは、何か大きな緊張が解かれた瞬間である。自分を変えた最大の「気づき」は、三年間過ごした南方の戦場であった。

死を免れない戦況下、国のために潔く一命を捨てようと死を受け入れた。すると、忽ち心が解放され、勇気が湧くとともに、自分が魂の存在であることに気づかされたのである。

また「無心」の状態とは、我を忘れて没頭する時やいつものコースをジョギングする単調な動きを繰り返していた時であった。リラックスや「無心」の時が気づき易いのは、その環境が脳の抑制を解き、脳内に空白がつくられるからである。脳が空白にならない限り「気づき」は生まれない。フランスのポアンカレは「気づきとは、突如、天啓が降ったかのように考えが開けてくるものである。いくら努力しても好結果は得られないと諦めて、一見途方もない見当はずれをしていたかのような気がする幾日かが続いた後でなければ、突然の霊感は決して下ってこない。」と述べている。

「気づき」は自分を知ろう、与えられた命を活かそうと一途に打ち込むことから生まれ、人生をつくり変えるのである。さらに、気づきによる新しい考えや素晴らしいアイデアは、創造の核となる。

それが私たちの生き方を変え、幸せにするとともに、己を社会貢献の存在にするのではないだろうか。

記事は、予科練465号に「孫への提言」と題してご自身の戦場体験録を寄稿された特別会員の多田野弘様から

投稿されたものです。まさに、我々は戦後七十五年を過ぎて、何故愚直なまでに慰霊祭をやり続けるのかという、海原会の存在意義にもつながる「魂」について触れられたものです。

死を目前に突き付けられた特攻隊員が、どうして笑顔で写真に納まることができたのか、ほんの少しだけ理解できたような気がしました。「魂は肉体に宿り、心と身体を支配し、統御する。魂こそが真の自己だ。」

そんな予科練戦没者の「魂」を供養し改めて「自己」を見つめなおす。

理解されているようで、意外と理解されていない「慰霊祭の意義」を改めて考えるきっかけを与えていただける記事だと思います。この写真は特攻隊員として確実な死を数日後に控え、待機を命じられた仮宿舎の前でほほ笑む乙飛十八期の同期生四人組です。

（事務局）

天国へのメッセージ（募集）

海原会では第五十五回予科練戦没者慰霊祭に向けて、左記により、「天国へのメッセージ」を募集いたします。貴方が思いを寄せる予科練戦没者や、いまはもう会うことのできない大切な方にメッセージを届けてみませんか。

記

一　募集期間

令和三年九月一日～令和四年四月三十日

二　メッセージの内容

特に問いません。三百字以内で貴方の想いを書いてお送りください。

三　書式等

ハガキ、手紙、メール等を利用し、書式は問いません。

四　お寄せいただいたメッセージは、機関紙及び海原会のホームページに掲載させていただくほか、第五十五回予科練戦没者慰霊祭で発表させていただく場合がありますので、ご了承ください。

五　送り先

〒140-0013 東京都品川区南大井六丁目十六の十二

公益財団法人海原会

事務局

mail:

y-hirano@yokaren.jp

三四三空隊史⑧

鴛渕孝　第七〇一飛行隊長を偲ぶ

山田良市（七〇一）

戦局もいよいよ押しつまった昭和二十年七月二十四日。この日の朝、土佐沖の敵機動部隊から発進した艦載機約五百機が豊後水道を北上、呉方面に侵攻中との警報に接し、大村基地では、可動全機の紫電改をもってこの敵大編隊を迎撃するに決した。可動全機といってもわが三四三空は、たびかさなる激戦で、消耗も激しく補充も十分でなく、可動機はわずかに二十一機にすぎなかった。

このような兵力比の大差の場合でも、「敵をみて戦わないという手はない」「みつけた敵機をかたっぱしから撃墜し、三四三空が怒涛のような敵の進撃を喰いとめるための突破口をつくらなければならない」

という源田司令以下一兵に至るまでの信念に燃えて、三〇一、四〇七、七〇一の三個飛行隊合わせて僅か二十一機の紫電改は、鴛渕孝大尉（戦闘七〇一飛行隊長）の指揮官機を先頭に午前九時四分大村基地を発進豊後水道にむかった。

鴛渕大尉は、わたしが兵学校に入校したときの一号生徒（六十八期）で、ただ単に先輩と後輩、隊長と分隊長という単純な関係でなく、呼吸がぴったりあった一号と四号との関係であり、また互いに信頼しあっていた。鴛渕隊長ほど上官からも部下からも信頼された人物はめずらしい。

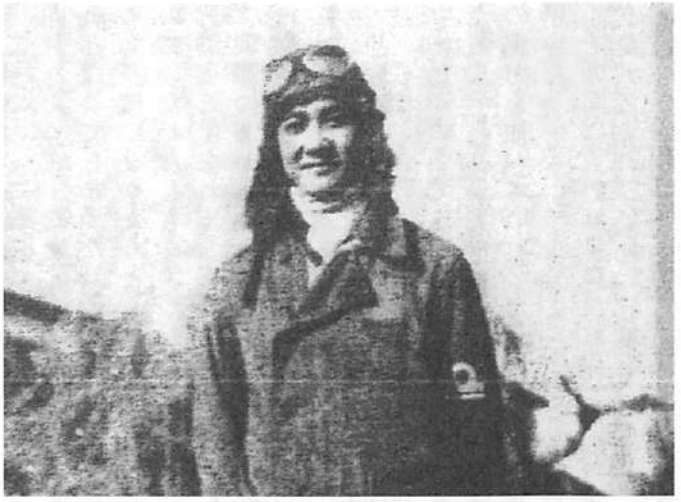
それは大尉のみごとな統御によるところが大きい。このため隊員たちも「隊長とともに死す」ということに誇りを感じていたものであった。

性質は温厚な武人であったが、ひとたび戦闘となれば、その温厚さもふっとんでしまうほどの闘志をかきたてた。

いかなる場合にも常に先頭に立って進んだものであった。

また多数機編隊を指揮誘導する空中指揮能力も抜群で、私たち部下には絶大な人望があり、隊員たちはこの隊長を誇りにし、事あるごとに自慢していた。

したがっていま五百機からなる敵の大編隊を前にしても、不思議にこわいとか恐ろしいという気持は湧いてこなかった。



命のやりとりいうものは、何回経験しても恐ろしくこわいものである。

だが恐ろしくともこわくとも、これに負ければ負けたほうが地獄行きである。

しかし敵とやりあうときは、こわさというものは吹きとんでしまい無心になるから妙である。

我々二十一機の紫電改は、鴛渕隊長指揮のもとに豊後水道上空で敵の大編隊の接近を待った。

地上から指示をあたえる源田司令の声がさかんに無線機にとびこんでくる。

やがてゴマツブを散らばせたような無数の黒点が目にとびこんできた。

敵機群はまだ気がついていないのではないかとおもえるほど、悠々と南下をつづけている。

呉方面の爆撃を終えて土佐沖の母艦に帰投中である。

三十機あまりの編隊がわずかの間隔をおいてひきつづきやってくる。たぶん今日は約五百機との情報だから、十数個梯団にもおよんであるはずであるが、わたしの目にうつるのは、その約半分の二百五十機ほどだ。それにしても圧倒的な兵力である。

いかに精鋭をほこる紫電改部隊とはいえ、わずか二十一機ではまともにたちむかってはかなう道理がない。まして敵の先頭編隊にかかろうものなら、後続編隊にとりまかれてなぶり殺しにあうのが関の山である。

そこで後尾の編隊を攻撃目標とした。先行した編隊が後続編隊の急を知って引き返して戦闘に参加するにはかなりの時間がかかる。その間に目標の編隊を片づけて電光石火のごとくひきあげれば、最小の犠牲で最大の効果をあげることができるわけである。

だが最後尾の編隊を狙うには、発進時機の関係や紫電改

の滞空時間の関係から、きわめて困難であったので、先行している編隊と後続の編隊との間が若干ひらいている一編隊に向って鴛渕隊はねらいをつけた。

敵機にさとられないようにジリジリと上方より近づき敵編隊の殆んど真上に占位した。その瞬間鴛渕隊長機は機首を下げた。高度六千メートルからの後方急降下攻撃開始である。

これを合図に、七〇一、四〇七の両飛行隊が突撃し、ただちに激戦のウズをまきおこした。

わたしも隊長機とならんで第一撃目の二十ミリ機銃弾を敵機目がけて発射し、ふたたび態勢をたてなおして第二撃目にはいった。並んで飛んでいる隊長機も私とおなじように第二撃目の態勢をとっていた。

このころになると敵編隊もみだれ、またそれまで上空掩護の任務についていた三〇一飛行隊は敵の後続編隊が近づいてきたのでこれに攻撃を指向したため、またたくまに乱戦となってしまった。このため隊長機にぴったりとくっついていたわたしも、いつしか鴛渕機とはなれてしまった。

戦闘のあいまをぬって隊長機をさがしたところ、鴛渕機には三番機の初島二郎上飛曹がピタリとついているのを確認し安堵した。

「初島がついてるから大丈夫だろう」と初島上飛曹の日頃の実力を知っているわたしは思った。

その間にもいり乱れた彼我の機が交叉するなかで、あたりをみまわすと初島機がついたままかなりはなれたところで格闘している隊長機がチラリと見えた。「深追いしなければよいが……」と思いながら機銃の発射把手をにぎりつづけた。

これが隊長機をみた最後であった。

まもなく私は燃料や機銃弾が心細くなり戦場を離脱、大村基地に帰投した。だがいつまでまっても、鴛渕隊長と初島上飛曹は帰ってこなかった。

こうしてこの日の空戦であげた戦果は十六機ということであったが、その後の調査でさらに二、三機増加された。

しかしその代償として鴛渕隊長以下六機が未帰還となった。

三四三空は、三月十九日の戦闘以来感状や祝電などいろいろもらった。この日の戦闘でも陛下からご嘉賞のおことばを賜り、隊員一同非常に感激したが、なぜか戦闘七〇一飛行隊員の胸には、ポッカリと大きな穴があき、飲む酒もまずかったのをいまも忘れることはできない。

青空に輝く火ダルマの巨体

小高登貫（四〇七）

五月にはいると、九州の上空にB—29が侵入しはじめ、大型機による空襲が活発になってきた。そこで私達紫電改はこのB—29を撃墜するためのロケット弾を装備した。

三号爆弾にロケットをつけたものでその試射が大村湾で行なわれた。地上に三点姿勢のままでおかれた紫電改の翼に長さ六十糎のロケットが取りつけられた。発射装置はもちろん電気発射で、そのスイッチは操縦桿の握りに小さなボタンが装置されている。搭乗員全員がその説明を聞いたのち、さていよいよ発射である。

私たちは目をまるくして、じーッと見まもっていた。

「ヨーイ、テー」同時に翼の下のロケット弾は真っ赤な尾を引いてすみきった大村湾の上空へ撃ち上げられた。「シャー」と音をたててロケットは、クルリ、クルリとまわりながら千米ほどのところで、ドカンと爆発した。その間三秒ないし四秒である。

ロケット弾は爆発と同時に黄燐がきれいに飛び散り、ちょうどタコの足をひろげたようだった。

私は二〇二空当時、セレベ

ス島でよく三号爆薬でコンソリデーテットを攻撃した。
それとまったく同じである。「よしこれならB―29もだいぶ落とせるぞ」と心強く思った。またB―29に対する攻撃方法を三四三空ではいろいろと研究したが、発射した弾丸がどうしても後落する。その原因はどうしてか？などと追及した結果、

① 射撃された弾丸はかならず円をえがくのが弾道であり、また飛行機にしずみが出るとなお射撃した弾は山をなして飛ぶ。

② おたがいに反航する物体であるため、ねらった物体より後ろへと弾が飛ぶ。

この結論から、三四三空はその原理を正反対にすることを考えた。
それは紫電改を目標物体に対し背面にすることで、したがって、射撃された弾丸は目標物体に対し前へ前へと弾丸で掬って行くわけだ。そしてB―29の機体の前方へ弾丸を射ち込むことを考えついた。これが垂直背面攻撃法であった。
五月八日晴、今日も空襲のサイレンは大村湾に鳴りひびいた。それっとばかり紫電改は大村基地の芝生を思切りけって飛び上がり、佐賀の上空でB―29四機を発見した。高度は六千米で、この当時のB―29は、わりあいに低高度で侵入していた。
我小隊はその四機に攻撃をしかけた。翼幅四十米以上もあるB―29は美しい編隊を組んで遠慮なしに飛んでくる。
目標は一番外側のB―29カモ番機だと一番機が攻撃を開始、無線電話を通じて私たちの耳もとでくり返しがなる。
「攻撃開始、攻撃開始」
私はすばやくB―29に近づいていった。同時に小隊はそれぞれ単機となりつぎつぎと接敵をはじめた。その距離千五百米。高度差千米。敵はがっちりと編隊を組んでいる。
接敵を終え先頭の機は切り返すと、みるまにものすごい勢いで射撃を開始した。垂直攻撃の機からまたB―29の機銃から曳光弾の線がこう差した。B―29のエンジンからは白色の煙がふきだした。
見事な射撃である。よしッ、今日は最初からいいぞ、と思いながら私も攻撃するためにぐっと接近した。
慎重に近づき左胴体へB―29を見ながら切り返した。その距離千三百米、高度差千米、私は完全に背面となった。するとB―29は見えなくなった。が、すぐまた巨体から白煙を吐いているB―29を私のOPL照準器は確実につかんだ。機の速度は増し、見る間に照準器から翼がはみでる。
距離五百、三百、二百、全力を出し発射レバーを握る。ダダダダダ……前方から流し射ちをしながら操縦桿を引いた。
弾丸がエンジン、翼に命中するのがよく見える。速度四百ノット近い私の機は、B―29とB―29の間をものすごい速度で下方にぬけた。B―29に体当りすん前である。B―29から射撃してくる弾丸はまったく無かった。射ってこなかったのか、あるいは私に見えなかったのか一発も飛んできた様子はなかった。
四百ノット近い速さの紫電改の操縦桿を速度に応じて静かに静かーに、じり、じり、と引いた。機体に無理のかからぬ操縦である。B―29は二番エンジンから白煙をふきはじめた。
「やったぞ」と思いながら降下をつづける。みればそのB―29は少しずつ編隊から遅れはじめている。
「ようし、もう一息だ」と私たちは、一回攻撃をすると、前方へ前方へと飛び、そして第二撃目をかけるため高度をとった。
前方二千米の位置から私は二撃目の接敵にはいった。「ヨーイ、テー」切り返えした私は、またも二番エンジンを照準器に入れて思いきり接近し発射レバーを握った。ダダダダダ……。
二十粍機銃も焼けよと火を

吐く。すばやく避退すべく機体の中に体をちぢめながら垂直に突っ込んだ。速度計は四百ノット近い。

一息つくまもなく機首をジリ、ジリ、と引き上げながら攻撃したB—29を見ると、両翼のエンジンは火ダルマと変わっていた。真っ青な空に真っ赤な火はじつにきれいだった。

その間他の小隊も、同じような攻撃で一機を確実に撃墜した。残った二機のB—29は大分の海岸線へと、慌てたかのように逃げ去った。

私たちのこの新しい垂直背面攻撃方法はまったく効果的で、それからは各小隊とも犠牲者もなく私たちもB—29への攻撃にますます自信を持った。

だがこの攻撃は、最終時の引き上げを注意しないと紫電改は空中分解をすることがあり、前にも二機ほど分解したが搭乗員の内一名は助かっている。

五月十一日頃の空戦。この日もまた私たち四〇七、三〇一、七〇一飛行隊の紫電改四十機は、堂々大村基地を離陸し、各飛行隊が一群となって力強い編隊を組んで北に進撃した。

「今日のB—29は一機も帰すな！」と出発まえに源田司令の激励をうけた私たちは、「よし、頑張るぞ」と分隊長市村大尉をはじめ大変に張り切っていた。

飛び上がって約二十分ほどすると耳もとの受話器に声がながれた。

「敵機発見、B—29十一機」と、何回も伝えてくる。全身がブルブルする。しかも十一機とは大した獲物だ。

それは敵ながら、うっとりするほどみごとな編隊ぶりである。先頭の七〇一飛行隊はすでにロケット弾を発射するため反転しはじめた。

やがて前方八百米で、赤い尾を引いてロケット弾は発射された。「ボン、ボン」と十一機のB—29の直上で爆発した。実にきれいで、まるでタコの足がB—29にかぶさったようだ。

私達は前進してくるB—29に対し真上から攻撃に入る。

つぎつぎと連続的に射撃にうつった。B—29の巨体を照準器いっぱいにとらえ、射撃距離をちぢめた。交差する白い煙の線、ダダダ……思い切り発射する。

同じようにエンジンと翼面にパパパッと穴のあくのが見える。急降下の後静かに機体を引き上げる。

よしわれに被弾なし。私は敵の編隊を見た。ロケット弾や機銃弾を受けたB—29はガソリンの尾を引き、エンジンからは火を吐いている。

それは何回見ても青一色の空に美しく見えた。この攻撃で遅れるB—29が出てきた。

無線の受話器の声がひびく。「遅れるB—29を攻撃せよ！」「よし！」またも高度をとった。B—29は直掩戦闘機もつけずまるで日本機をバカにしたように飛来しているのだ。

私達は敵戦闘機のつかない爆撃隊とあって安心して迎撃戦ができた。

直上方垂直攻撃はその後何回となくくり返され、B—29はみるみる火ダルマとなり、ものすごい勢いで山中へ墜落していった。

たまりかねた他のB—29の編隊は針路を変えて逃げ出した。

「どっこいそうさせぬぞ」と紫電改はつぎつぎとこれに攻撃をくわえる。

紫電改の名誉にかけての奮戦ぶりを発揮した。大分の南方上空にきたときは敵はもはや三機になっていた。そのうちの一機もだいぶやられていたようだったので、もう墜落は時間の問題とみえた。

私の小隊はそれを見送ってゆうゆう帰途についた。だがその一機も市村分隊長の小隊が完全に洋上に撃墜して帰ってきた。

搭乗員の顔はみんな明るく元気一ぱいである。この日味方には一機の損害もなく一回

の空戦で九機のB―29を撃墜したのである。

大分上空で四〇七飛行隊の粕谷一飛曹は還らぬ人となってしまった。面白い小柄な粕谷はその後三十三年たって、大分市の人達にあたたかく葬られていることが判った。

初島二郎上飛曹

中島大次郎（七〇一要務士）

君は、甲種飛行予科練習生第九期出身、寡黙にて、色白のスマートな、戦闘七〇一飛行隊の搭乗員でありました。

昭和二十年三月二十日編成替にて、鷲渕隊長区隊の二番機、時には三番機として隊長護衛の任にあたり、昭和二十年七月二十四日豊後水道上空の邀撃戦にて、最後まで隊長機の護衛の任を全うし隊長と共に未帰還となりました。

昭和二十年四月十五日、翌十六日の菊水作戦（特攻隊進撃進路啓開ならびに上空支援作戦）の前夜、所は鹿屋基地谷あいの民家を借用した分散宿舎にて搭乗員と共に就寝し、私は初島兵曹と一つ毛布で一緒に寝ました。

その時私は「初島兵曹、鷲渕隊長を護ってほしい。隊長は戦闘七〇一のみならず総指揮官である。隊長を失えば戦闘七〇一はもとより三四三空の士気に関係し、また今後の日本海軍の制空戦闘機隊の命運にもかかわる。君は、敵機を撃墜するよりも隊長を護ることが大きな功績である。どうか隊長を護ってほしい」とお願い致しました。

彼は「要務士、いろいろ配慮もあろう、隊長のことは列機として責任の重大さを感じている。隊長はこの初島が護るよ」と毛布の中で語りあいました。

実は二十年三月十九日の松山上空邀撃戦にて、総指揮官である鷲渕隊長の帰投がおそく、確か一四三〇頃着陸されましたが、その間隊長二番機の石川菊一上飛曹は、敵グラマンF6Fを一機撃墜後自爆し、列機もばらばらとなり隊長の行動が全く不明でありました。

そのような状態で戦闘七〇一はもちろん、源田司令以下非常に心配されました。

この件が私の脳裏にあり前記のように初島兵曹にお願いした次第であります。

昭和二十年七月二十四日の豊後水道上空の邀撃戦では、初島兵曹は隊長列機として終始隊長を護り、隊長と行を共にしました。

第三四三空海軍航空隊　戦闘七〇一飛行隊
海軍上等飛行兵曹　初島二郎
（呉志飛二六五九）

戦闘概報

昭和二十年七月二十四日〇九〇四、呉方面攻撃企図ヲ有スル敵艦載機邀撃ノ目的ヲ以テ指揮官戦闘第七〇一飛行隊長鷲渕孝ノ三番機トシテ仮称紫電二一型、三四三―C八九号ニ搭乗大村基地発進一〇二五豊後水道上空ニ於テ敵F4U、F6F、TBF、SB2C約三〇〇機並ニ後続編隊二〇〇機発見、攻撃下令ト同時ニ編隊ハ大キク右旋回トナリ各中隊毎空戦ニ入ル、本人ハ隊長機ヲ終始護リ隊長機ト攻撃ニ入ル一撃後敵F6F一機白煙ヲ噴キ撃破ヲ認ム、三撃後隊長機ハエンヂンヨリ白煙ヲ吐キツツ次第ニ高度低下ス、本人ハ絶エズ隊長機ヲ護リ隊長機ト共ニ未帰還。

昭和五十四年七月十四日、愛媛県城辺町久良湾にて昭和二十年七月二十四日豊後水道上空邀撃戦の未帰還機六機の内一機が引揚げられました。

私も現地に参り引揚時の感

動を覚えましたが、当時現地の人より引揚機の不時着水状況を聴き、この機は初島機ではない。

初島機は、鴛渕隊長機と必ず一緒に鎮まっているだろうと、再び昭和二十年四月十五日夜の毛布の中での思い出にふけりました。

鴛渕隊長、初島兵曹をはじめ第三四三空編成以来勇戦奮闘された英霊の個々の方々の思い出にひたりながら、御冥福をお祈りいたします。

続く

豫科練の戦争

久山　忍　著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑤

甲飛十四期　戸張　礼記

落雷か？しかし雷がこんなに続けて落ちるわけがない。いままで聞いたことがない重い爆発音だ。

「空襲だ」あわてて飛び起きた。

同時に「総員起こし」「空襲」「退避」と連続した号令が耳をつんざいた。続けて「八戸、艦・砲・射・撃！」との号令がかかった。

空襲ではなく、艦砲射撃であった。

沖合いに敵の軍艦が来て砲撃しているのである。服を着るのももどかしく兵舎の外に駈け出した。とたんに基地の上空から凄まじい機銃音が響き、大鷲のような機影が頭上をかすめた。

敵の戦闘機である。敵の空母も来襲しているのだ。

「伏せろ。固まるな」

遠くから聞こえるのは班長の声だろう。また一機、飛行場を這うように舞い降り、機銃掃射しながら迫って来る。壕に飛び込む余裕はない。とっさに私は目の前の茂みにうずくまった。

火のような連射が来た。オレンジ色の曳光弾がすべて私にむかって飛んでくるように見えた。死の恐怖が襲った。夢中で木の根元に頭を押しつけてうずくまった。

やがて静まった。あっという間の出来事だったのであろうが、長い時間が経ったように感じた。

そのとき、私は伝令当直だったことを想い出した。私は本部の方に向かって駈け出した。本部に行くためには草原を横切らなければならない。一目散に草原を走った。そのとき背後に轟音が響いた。頭上に敵機が迫っている。私は思わず走りながら後方を見上げた。敵機がパッと二条の火煙を吐いた。

「やった！」

と喜んだ。敵機に味方の砲弾が当たったと思ったのである。しかし違った。それは敵機がロケット弾を発射した火炎だった。

掩体壕の一式陸攻が傲然と爆発炎上した。私は土手の陰に腹這いになって顔を伏せた。敵機が去った。うつ伏せのまま顔を上げた。一式陸攻が火柱を吹き上げている。見るも無残な姿だった。無念である。敵機の狙いは昨夜、苦労の末に夜中までかかって掩体壕に押し込んだ一式陸攻だったのである。

ふたたび敵機が轟然と舞い降りてきた。機影が頭上を掠める。見上げると、鼻が天狗のように高く真っ赤な顔をしたパイロットが派っきりと見えた。その眼は獲物を狙って光っていた。

翼の下からパッと二条の白煙を吐いた。と同時に鋭い矢がほとばしった。またロケット弾だ。白い矢は掩体壕の内部に突き刺さった。轟音とともに火柱が天に吹き上がった。

もくもくと湧き上がる黒煙のなかで一式陸攻のエンジンが音を立てて地面に落ちた。もがき苦しみながら頭がもげ落ちた巨人のように見えた。空の勇者の無惨な最期である。この日は終日、防空壕で暮らした。暗い壕内でひざを抱えたまま長い時間を過ごした。破壊された一式陸攻が目に焼き付いていつまでも離れなか

った。

翌日、基地の整備作業に行った。掩体壕の中の一式陸攻は全機エンジンが焼け落ち、翼は落ち、風防が飛び散っていた。前日、掩体壕に入らなかったためやむなく外に置き、ネットをかぶせて草木で偽装しておいた機は無傷だった。苦労して壕に押し込んだのは何のためだったのかとがっくりした。

そこへ、これまで必死の訓練に明け暮れていた先輩搭乗員の一団が、飛行服のまま目の前を無言で通り過ぎた。空襲により愛機を失った先輩たちである。

皆、ふてくされて憤懣やるかたなしの様子だ。一升瓶を片手に酒をガブ飲みし、よろめいて仲間に支えられながら歩いている者もいた。異様な光景であった。

我々は敬礼することも忘れて呆然として見送った。栄光ある日本海軍航空隊の終焉を見たような気がした。

タコ壺

昭和二十年七月二十五日、司令の最後の訓示を受けて航空隊を出る。

吹雪舞う三月にここ三沢空に来て、野草咲き乱れる五月を過ぎ今は夏草茂る七月である。この月日を思いやった。

陸戦、夜戦、特殊部隊、土方作業、そして空襲、陸攻部隊の壊滅等々。私は一度も戦わず、何事も成し得ず、今また追われるように北へ向かう。土浦空から上北の三沢空へ、そしてまた下北の大湊海兵団へ。大湊海兵団で我々は特別陸戦隊に編入されるのだ。

北へ、北へ。まるで頼朝に追われる義経主従のようではないか。真っ青な上空はるか遠くに、モクモクとそそり立つ山並みのような入道雲が見える。三沢空よ、さよならだ。

野辺地から大湊線で下北へ向かう。走る列車の左の窓外には蒼くうねる陸奥湾が広がり、右手は下北の原野が緑の中で眠っている。平和な海浜を列車は追われるように北へと走り続けた。

七月二十八日、大湊海兵団に到着した。下北も夏はやはり暑かった。

じりじりと照りつける太陽の日差しが強い。汗が流れる。体中から塩を吹きながら、重いテントをかついで幕舎の設営に励んだ。ここは下北半島の石持である。集落のはずれの林間に幕舎を設営した。何もない駐屯地である。

寝起きする場所から造らねばならなかった。ただし、ここの生活は規律に縛られた厳しい兵舎生活と違い、キャンプ生活のようでなんだか楽しかった。

しかし、楽しいと思ったのも始めだけで、生活の不便さはどうにもならない。厠（トイレ）は林の奥の方に穴を掘っただけ。洗面、入浴、洗濯はすべて小川のほとり。急揃えの流し台がいくつか並んでいたが、飯盒炊飯もままならなかった。

八月に入ると陸戦訓練が始まった。我が中隊の目的は石持納屋の海浜に上陸してくる敵戦車を迎撃爆破することである。そのために対戦車攻撃の訓練を行なった。

迎撃といってもロクな武器はない。砲などの重火器はもちろんない。小銃もない。頼りは手榴弾、対戦車用の棒地雷、ふとん爆弾などいずれも肉弾攻撃用のものばかり。

棒地雷というのは、棒状の六角柱のような形の地雷で、戦車のキャタピラの下に突き入れて爆破するものである。ふとん爆弾の正式名は忘れたが、平べったい異様な形の爆弾である。磁石で戦車に吸い付かせて爆破するのだという。

いずれにしても向かってくる戦車に壕（タコ壺）から飛び出して身体ごとぶつかる肉弾攻撃である。

訓練のときは木製の六角柱を使った。こんな訓練で実戦に通用するのか不安だった。（要は身体ごとぶつかって死ねばいいんだろう）と自分に言い聞かせるしかなかった。

某日、午前中、対戦車攻撃

訓練を行った。早朝の下北の濃いガスが幕を引くように晴れあがると、暑い日差しが照りつけて五体を焼いた。この夏は特に暑かった。

むせるような草いきれの地面を這いながら前進し、息を切らしてタコ壺に転がり込む。身を隠すだけの小さな穴に潜んで棒地雷を抱え込む。やがてキャタピラの思い地響きが腹の底を揺るがせて聞こえてくるはずだ。目の前に悪魔のような黒い車体の戦車が何台も迫る。そして鉄の塊が通り過ぎる瞬間、地雷を抱えてとびだすのだ。

いずれくる実戦のときを考えながら、穴から頭をそっと出してあたりを見回す。浜辺には津軽海峡の白波が滔々と打ち寄せている。ギラギラと輝く太陽の熱を跳ね返して砂浜が輝く。どこまでも続く白浜。その彼方には断崖がある。崖の上の青草に　は放牧された馬が五～六頭戯れていた。真っ青な空を背景にして絵のように平和な風景であった。

（こんな景色の中で俺は戦車に踏み砕かれて死ぬのか）

ふと思った。空を見る。一筋の飛行機雲が尾を引いている。B29の偵察機であろう。尻屋岬の方へ離脱していく。

小さな穴にうずくまっていると、すぐ目の前の津軽海峡に真っ黒な敵機動部隊が押し寄せてくるような恐怖に襲われる。

（間もなく死ぬんだな）

現在の最大の関心事は自分の死であった。死ぬときって痛いんだろうな、苦しいんだろうな、

（飛行機なら一瞬なのに…）

死への逡巡や怖れが言葉となって頭を駆け巡る。

また空を見上げる。穴の広さだけ開いた青の空間をB29が悠々と飛翔していた。時折きらりときらめく機体がナイフのように見えた。高高度の偵察飛行に違いない。三沢基地も千歳基地も直ぐそこなのに迎撃する味方機はついに見ることはなかった。

昭和二十年八月九日、早朝、空襲警報の発令があった。間もなく多数の敵艦載機が上空を過ぎる。錫片が大量に撒かれた。電波妨害のために撒かれたものだという。大湊軍港か、恐山麓の本部附近か、樺山飛行場か、どこかわからないが盛んに高射砲を打ちあげている。猛烈な射撃音が聞こえ、中空で砲弾が爆発すると黒煙と炎で空が暗くなった。

艦載機なら敵機動部隊（空母を主力とした艦隊部隊）も近くにきているはずだ。安穏だった下北にもついに敵が襲来した。北の果ての静けさが一朝にして破られた。いよいよ敵上陸か。ついに死が迫って来たのだ。私は空を見上げて呆然と立ち尽くした。

翌日の十日も敵艦載機が大編隊で来襲した。幸いに石持地区に空襲はなかった。大湊軍港の上空を敵機が乱舞する姿が遠望された。日本軍が地上から砲弾を打ち上げる。砲煙が空を覆う。その中をすり抜ける敵機の小さな姿が見える。味方機の姿はこの日も一切なかった。

十一日から対戦車攻撃訓練が開始された。二日にわたった敵の空襲も止み、下北は静けさを取り戻していたが、隊内は殺気立っていた。

敵の上陸が近いと予測しての騒然であった。訓練も前にも増して激しくなった。私たちに戦況は何も伝わってこない。本土決戦が間近いのだろうか。敵上陸はいつなのか。

十二日朝、陸戦の訓練に入る直前のこと、

「八月八日、ソ連が日本に宣戦布告し、満州に侵入した」

との情報を聞く。

卑怯な奴らだ。日本軍が弱るのを待って戦争をふっかけてきたのだ。ソ連の汚いやり方に無性に腹が立った。関東軍が応戦中だというが大丈夫だろうか。

ソ連は近い。もしかすると奴らが上陸してくるかも知れない。来るなら来い。戦うだけだ。隊内に緊張がみなぎる。対戦車訓練も一層激しさを増した。

続く

「甲飛九期　明石八朗さん」

海原会会員
冨澤奈津子
（山形県在住）

明石八朗さんは、大正十二年十二月十四日、宮城県仙台市にて父の康治さん、母のしんさんの五番目の男子として生を享けました。

明石家は兵庫県明石がルーツであり、伊達政宗公に呼ばれて仙台へときました。

戦時中まで、仙台市でも有名なお菓子屋さんでした。「塩瀬まんじゅう」がとても人気で、時代が時代であれば仙台銘菓となっていたほどであったそうです。

八朗さんは五人兄弟の末っ子。一番上のお兄さんとは一回り以上年が離れています。御兄弟はみな仙台第二中学へ通ったそうですが、八朗さんは残念ながら失敗してしまい、南光学園東北中学（現在の東北高校）へと進学しました。

しかし元来の負けず嫌いであったせいか、仙台市での予科練の入隊試験では第一位の成績での合格となり表彰されています。

日米開戦の直前に甲種予科練第九期生として入隊しました。

予科練でも彼の負けず嫌いは大いに爆発していた模様で、卒業時の成績は、一〇六人中十二番。

操縦員と決まり予科練卒業後の飛練では、筑波空にて中練教程、専修の乗機は艦爆となり、宇佐空で実用機訓練を受けました。飛練卒業時（宇佐空で）は三十一人中十一番。

飛練卒業と同時に五〇二空（千葉県茂原）へ配属となり、艦爆搭乗員としての錬成を約三か月、その後はフィリピンのダバオに原隊がある五〇一空へ。

すでに時は昭和十九年に入っていました。

五〇一空では主に、ダバオ～パラオ間を飛び、その海域を航行する敵艦隊の索敵任務についていました。

彼の最後の配属先は、二〇一空攻撃一〇五飛行隊でした。昭和十九年十月二十六日、特別攻撃隊「菊水隊」出撃のため、彗星艦爆での索敵中に敵機と交戦し戦死されたそうです。

戦死に至るまでの詳細な行動が分からず、特に攻撃一〇五飛行隊に着任してからの期間は、どこでどのように戦っていたのか分かりません。

五〇一空時代、エンジントラブルで不時着、ケガをして現場から歩いて基地へ戻り、ダバオにある病院に運ばれたそうですが、その後の消息は不明です。

明石家では、八朗さんとそのすぐ上の兄、博治さんも軍隊へと入り戦死されています。それもお二人ともフィリピンで、さらに戦死日が一週間し

海軍甲種飛行予科練習生第九期
故海軍少尉　明石　八朗　命

か変わらないのです。
八朗さんを知ったのは、二〇一五年秋、靖国神社の遊就館へ参った時でした。
英霊の御遺影が祀られる中、ふと目に留まったのが彼でした。
キリっとした姿でしたが、どこか優しさのある表情。
私の生まれ育った宮城県出身とあり、持っていたメモ帳へすぐに彼の名を書き記しました。
そこから何年か経ち、たまたま読んでいた乙飛十六期小沢孝公さんの書籍に、いきなり彼の名前が飛び込んできたのです。
小沢さんは八朗さんとペアとしてダバオ～パラオ間の索敵任務についていました。
そこで海原会の平野事務局長に内容をお知らせしたところ、彼のご遺族様へと伝わり、御遺族皆様が喜んでいらしたことを伺いました。
その後、予科練慰霊祭にてご遺族様とのご挨拶も叶い、仙台市にある彼のお墓への墓参も叶いました。
同じ故郷の先輩というだけの縁しかなかったのですが、蓋を開けてみれば様々な繋がりがあり、縁というものはいつまでも続いていくものなのだと強く感じました。
まだまだ彼の行動でわからない部分が多いですが、今後もご遺族様と一緒に、少しでも生きていた姿を見つけられたらと願うばかりです。
ご遺族様、平野事務局長、ご協力いただいた方々に感謝します。
そして一番は八朗さんに。
こうして幸せに生きられることに感謝しています。
また会いに行きますからね。

――――――――――――――――

故明石少尉の甥　明石英次様は現在海原会の評議員としてご協力をいただいております。

（事務局）

思いでの豫科練

甲飛第九期生　河野　光揚

昭和十六年中学五年在学中の夏休前、海軍中佐が来校し「海軍甲種飛行予科練習生」勧誘の演説会があった。
大阪府の受験生一千五百名から書類選考で二百名が学科と身体検査を行った。
その後合格通知がきて大阪駅に集まった者五十名、呉航空隊で軍隊の衛生係による再度の身体検査と適性検査を受けた。
やがて九月中旬入隊通知がきた。学校で送別会を開いて戴き、二十八日大阪駅に集合は僅か十六名となっていた。土浦駅に着き航空隊迎えのバスで阿見町の指定旅館に宿泊。翌日に再三身体検査と反射神経検査を終わり合格者は仮入隊した。
三十日帽子・軍服・靴等を貸与され、今迄の服類を一切梱包し自宅へ発送した。早速軍装を整え翌日の入隊式の予行演習となった。
十月一日、司令・海軍大佐・青木泰次郎（開戦時・赤城艦長）より「海軍四等飛行兵を命ず」そしてお祝いの言葉を戴いた。そして八百四十一名の若鷲が誕生した。
翌日より午前座学「通信・航海術・兵器説明と利用法・航空学・運用術・整備術」午後「短艇（カッター）陸戦・柔剣道・球技・水泳」
昭和十六年十一月一日海軍三等飛行兵に進級。
同年十二月八日米英に対し宣戦布告
昭和十七年一月一日海軍二等飛行兵に進級
二月紀元節の翌日より操縦偵察の進路確定の初飛行搭乗試験を行う。
初めての飛行で最初は落ち着かなかったが、二周目には大分慣れてきた。
寒稽古ではカッター訓練でもの凄い試練が続く。腕と、お尻の痛いのには辟易した。
三月末に操縦分隊と偵察分隊に再編成され、衣嚢や私物を持ち兵舎移動。

六月下旬突然の指令で、「天皇陛下が七月中頃（練習生の訓練を見たい）の大御心から、畏くも当航空隊に行幸に相成る」と、お達しがあり当隊全員の外出禁止、病室患者の移動禁止となり、兵舎近辺の雑草処理や清掃の厳重を申し渡された。

前日の七月十二日に予行演習があり、当日は新しい体操着と下着や、褌はスペアも入れ二本も支給された。

当日は、憲兵隊サイドカーも物々しく、高官車、菊紋の御車、侍従車等庁舎前に停車。

その後私達は模範演技として体操をご披露、ほかの分隊はそれぞれ、柔道・剣道等一斉に練兵場で繰り広げられた。

約三十分近く説明を受けられ視察され無事終了となった。そして嬉しい発表に兵舎が沸き立った。

それは夏休暇の発表だった。班長も機嫌良く

「元気に帰ってこいよ」と送り出してくれた。

おわり

大森事務所の移転準備報告

海原会の大森事務所の移転につきましては、機関紙「予科練」（令和二年三・四月号）にその目的などについて紹介させていただきましたが、今回はその後の経緯などについて紹介させていただきます。

令和二年度の評議員会において、事務所の移転の検討を開始する承認をいただき、約一年をかけて移転要領の検討を行いました。

その検討結果に基づき作成した「大森事務所移転計画」を、本年五月に行いました臨時評議員会において承認をいただき、事務所の移転が正式に決定いたしました。事務局ではその計画に基づき、現在本年十月末の移転完了を目標に作業を進めております。

既に阿見町に設置する新事務所の賃貸契約を終了し、現在は引っ越し作業に向けて事務局内の資料などの整理に着手するとともに、事務局の売却について不動産仲介業者を招聘して相談を進めています。

ほぼ半世紀にわたる大森事務所の歴史を滞りなく閉じるためにも、時間をかけかつ慎重に平常業務にできるだけ影響を与えないように準備を進めております。

新事務所へのアクセス等詳細につきましては、移転後機関紙にて紹介させていただきます。

（事務局）

雄翔館を見学されて

○令和三年三月九日
茨城県　大久保様

今日初めて雄翔館を見学に来ました。今はもう決して見ることの出来ない戦争時の様子を写真と共に公開して戴き有難うございます。

当時生きてこられた方々は一体どのようなお気持ちだったのかと、微力ながら考えました。

戦争体験していない私達は、このように記念館や学校の授業でしか学ぶことはできません。

ですが、この悲惨な戦争のことを絶対に風化させてはいけないと思いました。長く語り継いでいくべきなのです。様々なものが昔と変化し、どんどん便利になるこの時代だからこそ、未来を担う子供たちに対し、戦争の記憶を伝えていかなければなりません。

何より私たちと同世代の若者が、国のために散っていった事実は、とても悲しいことです。

○令和三年三月九日
茨城県　吉田様

私は現在二十一才となりました。ここまですくすく育ったのは親のおかげです。

こうして先輩方の文章を読ませていただき、もし今この平和が無くなったら、自分も胸を張って零式に乗る事が出来るのか、乗る人を見送る事ができるのか、とても悲しく涙があふれてきました。

観ている時涙でガラスが見えなくなり、とても辛く苦しくなりました。全国から若

い男性が訓練を行い、胸を張って天国へ行くことは凄い事だと勇気があり尊敬しますが、今後この様な事があった時には、天国にいる先輩方に顔向け出来ないとも感じました。とにかく涙が止まらず、親友と同期や家族の絆をより大切にしようと考え直す事ができました。

○令和三年三月十日
千葉県　加藤様
今もコロナウイルスへの対応や、オリンピックでのボランティアなどをみていると、どうしても若者が犠牲になっている感じが否めない。
予科練の子たちを特攻で死なせた歴史から、学んでいないように感じるのは私だけだろうか。

○令和三年三月十四日
東京都　田淵様
小学二年の息子と一緒に見る事ができました。
「なんで、人の写真が飾ってあるの?」と聞かれたので、丁寧に答えてやりました。二度とこのような事を繰り返さない事を願うばかりです。

○令和三年三月十七日
千葉県　廣部様　藤平様
何十年経っても、伯父の最後を教えて戴き、
(松田松次・昭和二十年一月一日フィリピンミンダナオにて戦死・昭和十七年十一期)
涙が湧き出る。悲しい。
戦争をしてはいけない。
貧乏で絹のマフラーも軍刀も無かったけど、立派に戦ったね。
伯父さん。ミンダナオへ迎えにゆくよ。　姪の一江

○令和三年三月三月二十六日
東京都　木村様
とてもせつないです。
この方達の想いを大切にしたいと思います
靖国神社にも必ず行きます。

○令和三年三月三十一日
茨城県　石原様
未来ある若者たちが、責任、使命と覚悟で散っていく。
こんな事がまだ世界ではある。続いている。こんな事は決してあってはならない。
私はそんな想いを込め、岩国の被爆者のおばあさん自ら描いた紙芝居を引き継いだ。沢山の人に戦争の悲惨さを伝え、考えて次の世代に託したい。

○令和三年四月十五日
茨城県　菅原様
私は今幸せな暮らしをしています。命を賭けて戦ってくれた方々の強い思いが実を結び、平和時代を生きているからです。
残して頂いたものは、命よりも大事な想い。その決意は、例えばどんな時代になろうと遠い未来もずっと語り継がれて、人々の心の中に生きると思います。
目を閉じれば永久の空にいる方々の護りたかったものを感じられますから、その贈り物を胸に深く刻んで、苦難でも感謝して笑って生きています。
どうか安らかに…憧れた平和な大空を、解き放された鳥のように、自由に羽ばたいて、おやすみください。

○令和三年五月二十五日
兵庫県　稲田様
小生にとって初めての見学で、おそらく最後の訪れになると思います。
武器学校の特別のご配慮によりまして、見学をお許し下され、厚く感謝を申し上げます。若人の戦死を無駄にしない国家を創り上げなければなりませぬ。英霊に黙祷。

(公財)海原会寄付者芳名簿
(敬称略)(単位千円)

令和三年三月より
五　鈴木　茂男(甲16)東京
五　蛭田　章(乙24)茨城
一〇　磯貝浩次郎(甲3)岐阜
五　中山　哲郎(一般)東京
一〇　伊藤かをり(一般)神奈川
五　大川　恭男(一般)茨城

三　池　太郎(一般)愛知
五　高部　博(甲13)東京
五　塩澤　貞夫(甲16)東京
五　夏目　博史(甲14)愛知
五　小野　源伯(乙23)茨城
五　栗田林太郎(甲15)埼玉
五　清野喜三郎(乙3)山形
五　岩澤　純造(乙20)神奈川
五　恵口　寛子(一般)東京
五　平賀　義治(甲13)神奈川
二〇　磯貝　孝子(一般)神奈川
一　遠藤　正男(甲12)千葉
五　磯部　恭子(一般)静岡
五　松浦　建三(甲14)栃木
五　酒井　章(一般)東京
一〇　川岸　義視(乙19)北海道
五　大久保浩之(甲14)佐賀
一〇　中原　耕三(甲13)北海道
一〇　北村　直也(甲13遺)長野
五　猪股　武溥(乙6)茨城
一〇　㈱小笠原荷役商事(一般)埼玉

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

お詫び

機関誌465号8頁（玉串奉納者ご芳名簿）に誤植がありましたので、謹んで訂正しお詫び申し上げます。

【誤】
一万円　東京都東村山市　新井　禄朗　様

【正】
一万円　埼玉県東松山市　新井　禄朗　様

【誤】
五千円　福岡県鳥栖市　大久保　浩之　様

【正】
五千円　佐賀県鳥栖市　大久保　浩之　様

事務局日誌

五月

十一日
慰霊祭調整会議
於　武器学校
酒井副理事、平野理事、湯原支部長、行方副支部長が武器学校広報援護班担当者と調整を行った。

十三日
海原会会員との面談
於　事務局
乙飛十九期のご遺族で会員である小野亜希様が事務局を訪問し、事務局長と面談

十六日
支部調整会議の開催
於　阿見町本郷ふれあいセンター内会議室
湯原支部長以下十名で、慰霊祭の準備について打ち合わせを行った。本部から、酒井副理事長、平野理事が参加した。

十六日
慰霊祭音響機器の確認
於　武器学校
音響担当の原会員、平野理事及び行方副支部長で、慰霊祭で使用する音響機器の点検確認を実施した。

十九日
雄翔園手水鉢樋交換
於　雄翔園
湯原支部長と平野理事が手水鉢樋を更新した。

二十日
日本産業広告社大熊氏来所
於　事務局
ネットワーク海原会の運営方針について、事務局長と意見交換した。

二十四日
NHK報道記者が来所
於　事務局
番組編集に関する協力要請について意見交換を実施した。

二十八日
慰霊祭準備
於　武器学校
酒井慰霊祭実行委員長以下、霞ヶ浦支部員等で慰霊祭の準備作業をおこなった。

二十九日
第五十四回慰霊祭
於　雄翔園
役員十七名、ご来賓等十二名をお招きして慰霊祭を開催した。

六月

二日
慰霊祭反省会の実施
於　武器学校
平野事務局長、湯原支部長、行方副支部長が参加して、武器学校広報班の担当者と反省会を行った。

「予科練」第466号9・10月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1日発行）
令和3年9月1日発行
発行人　菅野寛也
編集人　保坂俊雄
発行所　〒140-0013
公益財団法人　海原会
東京都品川区南大井6－16－12（大森コーポビアネーズ）
郵便振替　00140－9－54332
FAX☎〇三－三七六八－三三五一
〇三－三七六八－三三五二
定価500円

海原会会員の皆様へ

大切な人と寄り添うお葬式
家族葬
のことが知りたい

お葬式のご依頼や「もしものとき」に備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談・見積無料

お客様満足度 99%※
※当社施行客アンケート調べ

自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、ご希望に合わせたお葬式プランがございます。

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓
お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事
標準価格（10万円以上）の
10%割引
サービス提供エリア：関東・関西・東海

「お墓のお引越しガイド＆事例集」
無料で資料を差し上げます。

お葬式
葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀
祭壇標準価格の
20%割引
※一部斎場、一部商品は除く。新花で送る家族葬は優待料金
サービス提供エリア：関東

「お葬式の流れがわかる100項目」
無料で資料を差し上げます。

お仏壇
仏壇店は首都圏に2店舗（国分寺・千葉）。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇
店頭価格の
25%割引
※ただし、催事特価品と仏具小物、手元供養商品は対象外
サービス提供エリア：関東

「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」
無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは海原会事務局へ 03-3768-3351
お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO MEMORIAL ART OHNOYA
メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp